

平成 29 年度 プロジェクト全体 研究進捗状況

楠 淳證（センター長，龍谷大学文学部教授）

(1) プロジェクト全体の研究内容

（調書様式Ⅲ－1「①研究分野」「③期待される成果又はその公表計画」とⅢ－2 の冒頭のプロジェクトの部分）

調書様式Ⅲ－1「①研究分野」

本プロジェクトは，日本仏教をアジアを中心とした世界的視野の中で包括的に解明することを目的としており，また仏教自体の本来的なあり様がそうした総合的なアプローチを不可避なものとしているため，参加研究者も多彩であり，その分野也多岐に亘る。日本仏教そのものを主として史資料によって研究する真宗学・仏教学・仏教史学を初めとして，アジア諸地域に関わる歴史学，仏教美術・建築などの造形的側面からアプローチする仏教図像学，現地調査に基づき宗教の現状を明らかにする社会学・文化人類学，更には寺院をとりまく自然環境を史資料との関係において解明する植物生態学にまで及んでいる。人文科学・社会科学・自然科学の異なる分野に属する研究者が交流を深め，文理融合的な新たな視点を獲得し得る場を提供することにより，実りある独自の研究の遂行を可能とするところに，本プロジェクトの特色が存在する。

調書様式Ⅲ－1「③期待される成果又はその公表計画」

仏教が我が国の歴史と文化において担ってきた重要な役割を検証し，その社会性・公益性を明らかにすることは，現代日本社会の切実な諸課題への対応を考える際に，一定の有効な示唆を与えうる。また海外の日本仏教研究者・研究機関との連携において行われる本プロジェクトは，日本仏教研究の国際化の推進と，日本仏教さらには日本そのものの国際発信にも大きく寄与するものと信じる。

研究の成果は，国際・国内シンポジウム（各年度それぞれ1回開催），ワークショップやセミナー（各年度に複数回開催），ワーキングペーパー（ウェブサイト各年度10本程度掲載），研究報告書（年1回刊行），ニューズレターBuddhist World（仮称・年2回刊行），ウェブサイト（随時更新）などの形で公表する。更に，龍谷ミュージアムと連携し，常設展・特別展にかかわる企画立案に参画する。なお，プロジェクトの達成度などを検証するために，本学に設置されている「研究評価委員会」において学内外有識者により中間及び事後の外部評価を受けることが定められている。

調書様式Ⅲ－2（平成27年度欄の初め）部分

本研究プロジェクトの主体となる研究組織「アジア仏教文化研究センター」(BARC)が，2015年度発足の新たな全学的仏教研究拠点たる龍谷大学「世界仏教文化研究センター」の傘下に置かれることに伴い，新たな組織と研究体制に即した研究スペースを確保し合理的に配置するため，大宮舎白亜館の3階・4階を改修し，効果的に共同研究を進めるための研究室を整備する。

また，次世代の研究者を育成するために，各グループに博士研究員を1名ずつ計2名，研究遂行を支援するスタッフとして各グループにリサーチ・アシスタント1名ずつ計2名を採用する。

(2) 平成29年度のプロジェクト全体の具体的な研究内容

（調書様式Ⅲ－2「年度別の具体的な研究内容（【平成29年度】部分）」）

【プロジェクト全体の計画】

- 1) 研究総会と個別研究会を開催する。
- 2) 海外及び国内でのフィールドワークを実施する。
- 3) 親鸞浄土教の意義を探究するため「浄土教」をテーマとした国内シンポジウムを開催する。
- 4) 国内外の仏教系 NGO に関するワークショップを開催する。インドからエンゲイジド・ブディズムの運動家を招聘し、セミナーを開催する。「越境する日本の女性仏教徒」をテーマにした国際ワークショップを開催する。
- 5) 公募研究事業を継続し、国内外から研究者を募る。
- 6) ウェブサイト運営とワーキングペーパーを掲載し、ニューズレターBuddhist World（仮）及び研究報告書を刊行する。
- 7) 龍谷ミュージアム平常展・特別展の企画運営に協力する。

（３）平成２９年度の進捗状況・研究成果・根拠データ等（ユニット固有の活動は除く）

＜上記（２）「具体的な研究内容」の進捗状況及び達成度＞

- 1) 研究総会と個別研究会を開催した（※各ユニットの進捗状況を参照）。
- 2) 海外及び国内でのフィールドワークを実施した（※各ユニットの進捗状況を参照）。
- 3) 親鸞浄土教の意義を探究するため「浄土教」をテーマとした国内シンポジウムを開催した（※グループ１ユニットＡの進捗状況を参照）。
- 4) 国内外の仏教系 NGO に関するシンポジウムを開催し、またインドからエンゲイジド・ブディズムの運動家を招聘してセミナーを開催した（※グループ２ユニットＡの進捗状況を参照）。「越境する日本の女性仏教徒」をテーマにした国際ワークショップを開催した（※グループ２ユニットＢの進捗状況を参照）。
- 5) 公募研究事業を継続し、本年度は４名の公募研究員を採用した（後藤康夫、安藤徳明、スダン・シャキャ、井上綾瀬）。
- 6) ウェブサイトを運営し、ワーキングペーパー等を掲載し、ニューズレターBuddhist World 及び研究報告書を刊行した。
- 7) 龍谷ミュージアム平常展および第 25 代専如門主 伝灯奉告法要記念特別展「浄土真宗と本願寺の名宝Ⅱ」の企画運営に協力した。

＜上記（２）以外でプロジェクト全体として新規に実施した研究内容の進捗状況及び達成度＞

- 国際シンポジウム「南都学・北嶺学の世界—法会と仏道—」を奈良の薬師寺で２日間にわたって開催した（研究会一覧①）。その内容をもとにした研究論集、楠淳證編『南都学・北嶺学の世界—法会と仏道—』（法蔵館）を、2018 年 3 月に刊行した。

＜問題点（実施できなかった研究を含む）＞

- 特になし。研究計画どおりの事業が実施された。

平成２９年度プロジェクト全体に関する研究活動の根拠データ

＜研究総会・全体研究会・シンポジウム・その他の活動一覧＞

①2017 年度 第 1 回 国際シンポジウム

■テーマ：南都学・北嶺学の世界—法会と仏道—

■開催日時：2017 年 6 月 3 日（土）～4 日（日）

■場所：法相宗大本山薬師寺

■報告者・報告題目：

【1日目】

〔第1部：法会と論義〕

永村 眞（日本女子大学名誉教授）

「中世南都諸寺の法会 ―講説・論義・打集を中心に―」

楠 淳澄（龍谷大学教授）

「法相論義と仏道 ―「一仏帰依」か「多仏帰依」か―」

〈法会実演〉

薬師寺衆僧 薬師寺伝灯の法会

〔第2部：法会の空間〕

ニールス・グェルベルク（早稲田大学教授）

「法会と講式 ―南都・北嶺の講式を中心として―」

フレデリック・ジラル（フランス極東学院教授）

「法会と芸能 ―鴨長明、道元における月講式、三界唯心、月の和歌―」

藤井恵介（東京大学大学院教授）

「法会と仏堂」

〈討論会〉

コーディネーター：楠 淳澄

登壇者：永村 眞，ニールス・グェルベルク，フレデリック・ジラル，藤井恵介

【2日目】

〔第3部：僧の生活と持律〕

ポール・グローナー（ヴァージニア大学名誉教授）

「13・4世紀の天台円頓戒に関する論義 ―実導仁空を中心に―」

養輪顕量（東京大学大学院教授）

「南都の戒律 ―中世復興から現代を考える―」

玉木興慈（龍谷大学教授）

「親鸞と戒律 ―無戒名字の比丘―」

〔第4部：東日本大震災と仏教 ―仏道の現代的意義―〕

〈基調報告〉

大谷徹煥（法相宗大本山薬師寺執事）

「今、仏教に何ができるか ―被災地をめぐる―」

〈討論会〉

コーディネーター：若原雄昭（龍谷大学教授）

登壇者：

金澤 豊（龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員）

「岩手県陸前高田市における浄土真宗本願寺派の対人支援について」

安部智海（浄土真宗本願寺派総合研究所研究助手）

「宮城県名取市における浄土真宗本願寺派の対人支援について」

高見昌良（天台宗務庁社会部社会課課長）

「問われた我々の存在意義 ―天台宗防災士の誕生―」

森本公穰（華嚴宗大本山東大寺執事）

「仏教徒として、今やるべきこととやっておくべきこと」

■参加者 : 191 名 (両日合計)

■共催 : 法相宗大本山薬師寺

②2017 年度 第 1 回 研究総会

■開催日時 : 2017 年 8 月 2 日 (水) 13:30～15:00

■場所 : 龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室

■参加者 : 24 人

③2017 年度 第 2 回 研究総会

■開催日時 : 2018 年 3 月 14 日 (水) 13:30～15:30

■場所 : 龍谷大学大宮学舎清和館 3 階ホール

■参加者 : 17 人

＜研究総会・全体研究会・シンポジウムなどで協力を得た学外機関・研究者一覧＞

①永村 眞 (日本女子大学名誉教授) 【第 1 回 国際シンポジウム】

②ニールス・グェルベルク (早稲田大学教授) 【第 1 回 国際シンポジウム】

③フレデリック・ジラル (フランス極東学院教授) 【第 1 回 国際シンポジウム】

④藤井恵介 (東京大学大学院教授) 【第 1 回 国際シンポジウム】

⑤ポール・グローナー (ヴァージニア大学名誉教授) 【第 1 回 国際シンポジウム】

⑥大谷徹煥 (法相宗大本山薬師寺執事) 【第 1 回 国際シンポジウム】

⑦安部智海 (浄土真宗本願寺派総合研究所研究助手) 【第 1 回 国際シンポジウム】

⑧高見昌良 (天台宗務庁社会部社会課課長) 【第 1 回 国際シンポジウム】

⑨森本公穰 (華嚴宗大本山東大寺執事) 【第 1 回 国際シンポジウム】